6月4，5日第39回全国集会で報告する増本一彦会長。

不屈

(540号付録)
京都版　第408号
2019年6月15日

治安維持法犠牲者
国家賠償要求同盟
京都府本部
〒604-8854
京都市中京区壬生仙念町
30-2 労館5階
国民救援会京都府本部内
(電) 075-801-3915

第３９回全国大会開催される！歴史の転換点を迎え、「さらに行動する同盟」へ飛躍しよう！

治安維持法国賠同盟の第39回全国大会が6月4～5日に東京で開催され１３０人が参加、26団体1個人と31人の国会議員のメッセージをいただきました。

初めに増本一彦中央本部会長があいさつし、「創立50周年記念・同盟運動躍進年間」を軸に前大会以降の奮闘に感謝の意を表しました。50年の同盟の歴史で最高の峰である１万６３９７名の会員に前進したこと、平和と民主主義のための闘いと抵抗の歴史の記憶遺産を発掘・蓄積し前進させてきたことを報告。２０２０年代への突入という歴史の転換期を迎え、「さらに行動する同盟」へ飛躍しようと呼びかけました。

続いて井上哲士日本共産党参議院議員、国民救援会会長、自由法曹団幹事長、全労連副議長、レッドパージ反対全国連絡センター事務局長が来賓あいさつを述べました。

討論では、50周年記念の躍進運動で、50人拡大した、97人人拡大した、などの経験が次々に出され、拍手に包まれました。この勢いで数万人会員を達成し、安倍政権を倒そうとの意思を固めあいました。特別決議「9条に自衛隊を書き込む憲法改悪に断固反対します」を採択、増本一彦会長、田中幹夫事務局長以下役員を選出しました。京都から4人が出席しました。

【わたしの一期一会】

「京大・滝川事件・1933年夏ーそれぞれの余波」ー学生評論の廃刊となった1937年7月号の斉木昂投稿「ルネ・クレールの歩んだ道」をたどるー

佐藤　和

プロローグ

「京大・滝川事件」は、京都においては『世界文化』（1935年2月創刊）・『隔週新聞「土曜日」』（1936年7月創刊）・『学生評論』（1936年5月創刊）を生む契機となった。特高警察により「京都・人民戦線事件」としてでっち上げられ、関係者の検挙によりいずれも廃刊となった。「学生評論」については資金難にあえいでいたとはいえ、それなのに継続していたのだが、1937年11月38日に発行人・草野昌彦の検挙により7月号をもって廃刊となった。その最終号の『学生評論』1937年7月号（6月発売）に一本の映画評論が載った。フランス映画の監督、「ルネ・クレールの歩んだ道」という斉木昂の投稿について、若干考察してみる。1931年の9月18日の柳条湖での鉄道線路爆破事件からはじまった満州事変により、「非常時」の重苦しさが強まっていった。1936年の2・26事件を契機に軍部急進派と革新官僚は、総動員体制の確立を目指すファシズム化をすすめた。「大学はでたけれど」の高等遊民とその予備軍は、ファシズムの危機にどう対峙しようとするのか自己模索していた。「社会ファシズム論」の呪縛にとらわれていたもの、コミンテルンの「人民戦線論」への転換に希望を見出そうとしていたもの。差し迫る破局の1937年7月7日の盧溝橋事件を発端とする日中戦争の全面化を前にして、もう一つの「転形期の人々」をフランス映画に仮託して、斉木昂はこう切り出す。（補注・草野昌彦が主宰した『学生評論』を復刻する会が、1977年に白石書店から復刻版全三巻を出版したが、その月報でもペンネーム・斉木昂の本名は判明していない。編集人草野が特高に自供せずに知ったのか、はじめからペンネームのみで採用し本名不明のままだったのか。当時、編集をしきっていた永島孝雄は検挙されたが、自供せず事実上獄死した。）

1、なぜ「ルネ・クレール映画」なのか？

「ルネ・クレールのトーキイ作品は、だいたい二つの異なった傾向に分類できる。一つは『パリの屋根の下』『巴里祭』の様な抒情的傾向であり、他は『ル・ミリオン』『自由を我等に』『最後の億万長者』『幽霊西に行く』にみられる様な多少の風刺的傾向である。この抒情性と風刺性の二元的傾向は我々にはハイネを想起させる。」と斉木は冒頭に指摘する。「この二元性はクレールがゲエテの様に外的世界に対して二重の態度をとった事を意味せず、むしろハイネの場合の如く、盾の両面であったのである。何故なら、純粋な抒情詩人は資本主義社会の俗物性と激しく衝突せざるを得ず、その衝突は必然的に諷刺への方向を辿るだろうから。」と、ルネ・クレールの作品論を展開する。抒情性と風刺性のこの二元的傾向は、「外界が彼の個性を現実的に圧迫するに至るや、彼はこれに対して何等か積極的に反発せざるを得なくなる。この反発は浪漫主義への逃避やその他様々の形を取るのであるが、その際に彼の眼が自らの個性を圧迫する社会そのものへと向けられ、その社会の矛盾の洞察へ多少でも近づいたとき、彼は風刺の矢を以て、かかる矛盾に辛辣な攻撃を加えるに至る」とし、「こうした抒情的傾向から諷刺的傾向への発展を我々は今、我々の研究の対象であるクレールにおいて見出すのである。」と彼は思い入れたっぷりに解説する。

2、いわゆる「パリ三部作」を中心に

第一の「巴里の屋根の下」（1930年4月制作・同31年5月日本公開）

はパリの堀末が舞台の恋愛劇だ。パリの裏町の人のいい艶歌師（シャンソンの楽譜を売る―補注）アルベールとルーマニア系の美女ポーラとの出会いと別れが縦糸。「泥棒でたかりの親分」のフレッドがポーラを口説きダンスのおりに部屋の鍵を盗んだため、ローラは夜の街をさまよい、アルベールと偶然に出会い、彼の部屋にころがりこむ。そのアルベールは預かり物が盗品だったという嫌疑だけで警察に留置された時、一本の煙草さえ分かち合う親友でありながら、関わり合いになるのを避けたばかりか、アルベールが思いを寄せるポーラと恋に陥ってしまうルイという横糸。結論は、アルベールはわずかな人間的な絆である、友人と恋人を一挙にうしなう。彼は孤独の中に取り残される。「クレール自らもきっと、純粋な芸術家の常として、この様な社会の様々なクズや、機構からの圧迫や欺瞞を体験したに違いない。だから、クレールの主人公への同情―寧ろ共感―も、ひいては観客のそそぐ涙も、この不幸を如何ともなし得ない。否、むしろ観客は、クレール自らと同様、そこに映し出された自分自身の不幸の映像を見て嘆くにすぎないのだ。」と斉木昂は感情移入する。「なぜ、私たちはこんなにまでも不幸でなければならないのか?」と問いかけ、「この社会ではあらゆる不幸は、ただ『金』の欠乏から生じてくるということを、そして『金』が万事を支配しているということを」認識して、かくて次作の「ル・ミリオン」（百万長者・1931年制作）が製作される。

貧しいボヘミアン芸術家ミシェルが、偶然にも当たった「百万フランン」の宝くじを紛失してしまう。なくした宝くじを探そうとするミシェルと借金取りたちのグループ、宝くじを盗み取ろうとする泥棒団、泥棒を追跡する警官隊との争奪戦が、「金即幸福」を戯画化し、諷刺する。

続いて、「巴里祭」（1933年1月制作・同33年4月日本公開）は、タクシーの運転手ジャンと可憐な花売り娘アンナの恋のすれ違いがえがかれる。状況設定は「フランス革命記念日」のパリ。上流階級の人々の集まるレストランでは退屈極まるブルースと欠伸ひと、うわべばかりの型にはまった礼儀作法が支配している。下層勤労者階級は、朗らかに、愉快に、活発に、おじいさんもおばあさんと踊り、子供たちも賑やかにおどっている。レストランの支配人や給仕たちは、上流階級に卑屈につかえ、タクシーの運転手や花売り娘には横柄なのである。ところが、ジャンの友達の太っちょのタクシー運転手が、酔っ払いの金持ちと意気投合し、運転手が客席に金持ち紳士がタクシーのハンドルを握る「階級的な逆転の幻想」というエピソードを挿入するが、それも祭で酔っていた時の気まぐれでしかない。とはいえ、「金に幻滅したクレールは、再び恋愛や友情といった人間的な結合に救いを見出そうとしたのである」と斉木は概括する。

「ところで、こうした友情や恋愛といった人間的な結合や、既存秩序に対する人間的な反抗、いわば人道主義的、自由主義的な立場を大げさにふみにじるものが、このとき歴史の舞台に登場して来た。それはドイツにおけるファシズムの勝利でありナチスの文化破壊工作であった」とし、ナチスの政権獲得後に、クレールはファシズム独裁を正面から批判した「最後の億万長者」（1934年）、「幽霊西へ行く」（1935年）と制作をつづけた。

その上で、斉木はこの投稿の結論を述べる。「かくして岐路に立つクレールが今後いかなる方向に自己を発展させてゆくかは実に注目すべき事でなくてはならない。なんとなれば彼は退いて自己の魂を売り渡し、妥協の泥沼に陥るか、進んで新しい世界観に立つか、兎に角、従来の個人主義的世界観の清算に迫られているからであり、

かかる矛盾は同時に現代に於けるあらゆる良心的な芸術家およびインテリゲンチャをも亦とらえているところの矛盾であり、而も彼らも亦クレールと同じく、現実の情勢の逼迫、先鋭化によって、かかる二者択一に迫られているからであり、既に反ファッショ、文化擁護の道程を経て後者への途を敢然として選んだものが少なくないからである。」

投稿の終わりのP38のスペースには、世界史の「七月の暦」が1日から31日までどんな事件が起こったかをコラムとしてのせていた。縦に細長い紙面の目立つ14日目は、「フランス革命勃発―バスティーユ陥落（1789）。」つまり、革命記念日「巴里祭」への思い入れを、学生評論の編集人たちは学友諸君に求めていたのだろうか。映画「巴里祭」の原題は、「7月14日」だった。（次号に続く）

山本宣治生誕130年記念講演会
市田忠義さん講演

山本宣治生誕130年記念講演会が、5月25日宇治市で行われ、会場いっぱいの200人が参加しました。

本庄豊さんが開会あいさつを行い、シンガーソングライターのケイ・シュガーさんが、歌声～山本宣治を歌う～を披露しました。ケイ・シュガーさんは「平和、自由、平等、民主主義のために、命がけで声を上げ、行動し続けた人がいたこと、その火を継いで現代、未来につなげることを思いながら、歌いました」。

山宣生誕130年記念講演会で講演する市田忠義さん

記念講演は、「山宣の生きた時代と現代―未来に生きた人～山本宣治」と題して市田忠義日本共産党副委員長・参院議員が行いました。

市田さんは、高校時代、山宣の映画「武器なき戦い」を見て社会問題に関心を持ち出したと語り、山宣の生い立ちや、治安維持法反対を貫いた生き様を講演、現代、未来につなごうと訴えました。

6・1憲法学習講演会
～参議院選挙と安倍9条改憲のゆくえ～
渡辺　治さん講演

6・1憲法学習講演会が開催されました。「参議院選挙と安倍9条改憲のゆくえ―市民と野党の共闘で安倍政権に終止符を！」と題し、一橋大学名誉教授・9条の会事務局の渡辺治さんが講演を行いました。

渡辺さんは、①2017年5月3日以来、市民の運動、野党の頑張りが、安倍改憲発議を阻んできた。②しかし安倍首相は改憲を断念などしていない、参院選でも重点項目にしている。③改憲を許すか許さないか、正念場の2019年。参院選で自公3分の2維持で改憲強行か、安倍政権倒して改憲の息の根を止めるかの正念場だと強調しました。